

心の状態を表す動詞の再分類

原 沢 伊都夫

【要 旨】

日本語の心の状態を表す述語には、主観的な感情や感覚を表す感情形容詞と感情や思考・感覚・知覚などを表す心理的な動詞がある。これらの述語には、発話の瞬間における話し手の内的状態をそのまま表すという共通点がある。その意味で心理的な動詞は、一般的に言われる“状態動詞⁽¹⁾”としての機能を備えていると言えるのだが、同時に内的事象の時間的展開性があることからスル（シタ）－シテイル（シテイタ）のアスペクト的対立を持つとも言われ、“動き動詞”と“状態動詞”の中間的な存在であると見られている。しかし、これらの内的な動詞群を詳細に検証すると、スル形やシタ形で現在の内的状態を表すものとそうではないものがあり、前者は必ずしもアスペクトの対立を持つとは言えない。本稿では、このようなスル形とシタ形で現在の内的状態を表すものを“状態動詞”として認め、その他のものは“動き動詞”として扱うことを提案したい。これらの動詞は人間の心理的な側面を表すという意味では共通の特徴を有するが、実際の運用面では異なる特徴を備えていることから、このような分類は日本語教育という現場では実践的で有益なものになると思われる。

【キーワード】 内的状態性述語、感情形容詞、状態動詞、内的状態動詞、アスペクト対立

1. はじめに

話者の心の中を表現する述語には、「憎い」「痛い」「嫌いだ」「好きだ」などの感情形容詞と「思う」「ドキドキする」「見える」「わかる」などの内的状態を表す動詞がある。これらの述語に共通する特徴は、話者である一人称の気持ちを伝える表現として第3者への使用が制限されることが挙げられる。たとえば、「私はその犯人が憎い。」と言えても、「山田さんはその犯人が憎い。」とは言いにくい。これは、心の中の状態はその本人にしかわからないわけで、もし「山田さん」について言うのであれば、「山田さんはその犯人が憎いようだ／みたいだ。」などと、その人の様子を外面から判断して使うことのできる表現でなければならない。このことから、必然的にその表現は話者の心の状態に限られることから、会話文では特に「私」という一人称を表さなくても、コミュニケーションは成立することになる。したがって、先の例文であれば、「その犯人が憎い。」と言えればいいわけで、あえて「私」を入れる必要はない。同様なことは、内的状態の動詞にも当てはまり、「私はドキドキする。」と言えても、「山田さんはドキドキする。」とは言えない。第3者に対しては、「山田さんはドキドキしているようだ。」などとしなければならない。また、主語である「私」を入れる必要もなく、「あー、ドキドキする。」だけで、十分に自然な日本語となる。

これらの現象は日本語教育の立場から見ると、非常に重要である。つまり、これらの感情を表す表現では基本的に「私」を発話しなくてもいいと教えることが自然な発話へとつながることになるからである。また、第3者の気持ちはどのような表現で言ったらいいのかなど、その他の述語にはない制約を教えていかなければならない。しかしながら、このような内的な状態を表す述語（本稿では「内的状態性述語」と呼ぶことにする。）について、その中でも動詞については、研究者によって様々な意見があり、統一した見解があるわけではない。このことから、本稿では、このような話者の心の状態を表す内的述語について、日本語教育という観点から考察し、言語教育においてより実践的な分類の試案を提示したいと思う。

2. 先行研究

内的状態性述語に関する文献について、主なものを年代順に見ることとする。まず、西尾寅弥（1972）に、感情形容詞についての詳しい考察がある。西尾は客観的な性質・状態をなすものを属性形容詞、主観的な感情・感情の表現をなすものを感情形容詞と呼んだ。そのうえで、感情形容詞としての第一の条件を「それが感情の主体としての、人を主語にとりうるか否か」という点を挙げている。つまり、感情形容詞は話し手自身の感情・感覚しか表さないため、第3者への使用は通常成り立たないとする⁽²⁾。これについては、「人間が直接に経験できるのは、自分自身の喜怒哀楽や眠さ・痛さ・かゆみ等だけである。自分以外の人の気持ちや感覚は、その人の報知によって知ったり、外的な表れを通して推測することができるにすぎない。日本語の感情形容詞が、その瞬間における感情・感覚に関しては話し手自身についてしか断定的に用いることができないのは、この基本的な事実と相応じているように思われる。」と述べている。さらに、感情形容詞は対象が存在するのを基本とし⁽³⁾、その場合、「感情の主体を表す主語は『～は』の形で、感情の対象を表す語は『～が』の形で示される」と述べている。また、感情形容詞の下位区分として、「感覚」と「感情」を挙げ、前者は具体名詞を対象語とし、後者は体の部分を対象語とすることが多いことを指摘している。

次に、内的状態性述語をまとめて言及している文献として、寺村（1982）がある。寺村は、感情を表す表現には動詞と形容詞があり、それを統語的な観点から2つの形式に分類し、全体として以下の4つのグループ分けをおこなっている。

寺村（1982）による内的状態性述語の分類

動詞	一時的な気の動き (Xが Yに 動詞)	能動的な心の動き、積極的感情の発動 (Xが Yを 動詞)
	驚く、おびえる、おろおろする、青くなる、ぎょっとする、びくっとする、びくびくする、うろたえる、はっとする、とびあがる、ほっとする、安心する、安堵する、怒る、かっとなる、腹を立てる、腹が立つ、興奮する、酔う、浮かれる、沸く、うっとりする、陶然となる、失望する、がっかりする、がっくりする	愛する、憎む、いとしむ、恨む、うらやむ、惜しむ、ねたむ、やく、喜ぶ、悲しむ、苦しむ、楽しむ、恥じる、悔いる、なつかしむ、恋する、好く、好む、嫌う、望む
形容詞	感情の直接的表出 (Xが Yが 形容詞)	感情的品定め (Xが Yに 形容詞)
	怖い、恐ろしい、恨めしい、羨ましい、惜しい、妬ましい、愛しい、憎い、嬉しい、悲しい、苦しい、楽しい、懐かしい、恋しい、好きだ、嫌いだ、嫌だ、ほしい、～たい、困る、思う	恐ろしい、恐るべきだ、ばかばかしい、うらやむべきだ、悲しい、もの悲しい、愛らしい、可愛いらしい、哀れだ、いやらしい、憎々しい、憎らしい、憎さげだ、なげかわしい、このましい、よろこばしい

寺村は、感情の形容詞について、人称制限があることと通常の独立語文では感情の主体が主題化され省略されることを特徴として挙げている。また、感情の直接的表出に使われる述語は普通、形容詞だが、中には「困る」や「思う」などの、動詞でありながら形容詞と共通した性格を持つものがあることを指摘している。

工藤まゆみ（1995）は、内的状態性の動詞について詳細な分類を提示している。工藤はこのような動詞を内的情態動詞と呼び、アスペクト的対立を持つものの、内的な思考や感情や感覚は話し手のみが直接感知できるものであり、人称性と絡み合っている点が特徴であると、アスペクトの対立を持つ外的運動動詞とアスペクトの対立を持たない静態動詞との中間に位置づけた。その上で、思考動詞（「思う」「考える」など）、感情動詞（「あきらめる」「あこがれる」など）、知覚動詞（「味がする」「音がする」など）、感覚動詞（「痛む」「しびれる」など）に分類し、これらの動詞のスル（シタ）は基本的に1人称に限定されるとした。そして、スル形式には「態度表明文」と「感情・感覚表出文」があり、シタ形式には「確認・記述」と「現在における感情・感覚の表出」があるとした。これに対して、シテイル形式は人称性から解放された確認・記述文となるとしている。工藤の分類で特筆できる点として、感情動詞と感覚動詞の中にシタ形で現在における感情・感覚の表出を認めている点である。

工藤 (1995) による内的情態動詞の分類

思考動詞	
思う、考える、疑う、信じる／わかる、察する、祈る、期待する、願う、望む	
感情動詞	
あきらめる、あこがれる、いらいらするうらむ、うんざりする、恐れる、感謝する、感心する、感動する、気になる、苦しむ、敬服する、軽蔑する、後悔する、嫉妬する、心配する、同情する、悩む、憎む、腹が立つ、はらはらする、反省する、迷う、めいる、喜ぶ	シタ形で現在の感情を表す
	あきあきする、あきれ、安心する、驚く、がっかりする、困る、せいせいする、退屈する、助かる、びっくりする、ほっとする、まいる、弱る
知覚動詞	
味がする、音がする、感じる、聞こえる、ざらざらする、つるつるする、におう、ぬるぬるする、見える	
感覚動詞	
痛む、うずく、感じる、くらくらする、(目が)くらくらむ、疲れる、頭痛がする、どきどきする、震える、ほてる、むかむかする、(胃が)もたれる	シタ形で現在の感情を表す
	しびれる、つかれる、(のどが) 渇く、(腹が) へる

一方、日本記述文法研究会 (2007) では、上記の内的情態動詞は、アスペクトを持つ動き動詞の中に組み込まれている。その上で、「思う」「わかる」「どきどきする」「(～気が)する」などの内的な状態を表す動詞は、スル形の非過去形として発話の瞬間における話し手の思考や感情、感覚などをそのまま表すとし、これらがシテイル形で用いられると、発話時を含む広げられた時間での状態を表すと述べている。

3. 内的状態性述語

内的状態性述語には感情形容詞 (または、主観形容詞という言い方もある。) と内的な状態を表す動詞がある。感情形容詞については西尾 (1972) を始め、かなり深い考察があり、ここではそれらをまとめる形で紹介することにする。内的な状態を表す動詞については、人称制限を含め、感情形容詞との共通点を確認するとともに、その特徴について考察しつつ、内的状態動詞としての新しい分類を提案することにする。

3. 1. 感情形容詞

形容詞には一般的な事物の性質などを表す属性形容詞と話者の気持ちを表す感情形容詞がある。属性形容詞と感情形容詞の大きな違いは、一般的に属性形容詞はどのような事物に対しても使用されるのに対し、感情形容詞は基本的に一人称に限られることから、その使用においては人称制限を絶えず念頭に置かなければならない。

1) 私は背が高い。山田さんも背が高い。(属性形容詞)

2) 明日から休みなので、私は嬉しい。？山田さんも嬉しい。(感情形容詞)

属性形容詞は1人称だけでなく、3人称にも使えるのに対し、感情形容詞においては3人称である「山田さん」の気持ちをそのままストレートに表すことはできない。これは、第3者の心の内は本人しかわからないので、感情形容詞をそのまま使用すると、他人の気持ちを断定していることになり、座りの悪い表現となるからである。このような場合、断定を避ける表現で、そのような座りの悪さを回避することができる。

3) 明日から休みなので、私は嬉しい。山田さんも嬉しそうだ。

その他にも、「嬉しいだろう」「嬉しいかもしれない」「嬉しがっている」「嬉しいに違いない」など、外観から判断したり、推量したりする表現であれば、問題はなくなるのである。また、過去の出来事の場合、1人称でなくても、使用することができることがある。

4) 長期の休暇がとれると聞いて、みな喜んだ。私も山田さんも嬉しかった。

これは、過去の出来事の場合、現在までに山田さんの嬉しい気持ちが確認できているからであろう。また、小説などでよく使われることが、西尾(1972)を始めとする多くの研究者によって指摘されている。以下は西尾の例である。

5) 彼女は心から、助けがほしかった。彼女のために弁明してくれる第三者がほしかった。

さらに、西尾は「好きだ」「嫌いだ」という表現は3人称にも使えることを指摘している。

6) 私は山田さんが好きだ。太郎君も山田さんが好きだ。

西尾は、これらの好悪の形容詞を一般の感情形容詞とは違う独特の性質を持っているとして例外扱いにしているが、この現象は、「好き嫌い」という感情は表に出ることが多いため、その人の外面から内面を知ることができるからだと説明できるのではないだろうか。また、好き嫌いの感情はその場限りのものではないため、普段の言動などからも知ることができるからであろう。

感情形容詞の下位区分として、「感情」と「感覚」を表すものが挙げられる。いずれも対象をガ格で取るが、「感情」の形容詞では人物が、「感覚」の形容詞では具体物がガ格で示されることが多い。

7) 私は犯人が憎い。(対象=犯人)

8) 私は子供がいとしい。(対象=子供)

9) 私は日の光がまぶしい。(対象=日の光)

10) 私は頭が痛い。(対象=頭)

感覚の形容詞では、例文10)のように、身体の一部が対象となることが多い。また、「ねむい」「だるい」「ひもじい」など、対象を必要としない場合もあるので、注意すべきである。

11) 私は今朝から眠い。

12) 今日は何となくだるい。

このような例では、外からの刺激としての対象を取らず、身体の中からの原因によって成立すると西尾は説明している。

3. 2. 内的な状態の動詞

内的な状態動詞（工藤のいう内的情態動詞）の特徴について、工藤（1995）はスル形式における人称性とムード性とのからみあいを挙げている。そして、スル形では「態度表明」と「感情・感覚表出」を表すとするが、「態度表明」については内的情態動詞に限られるものではないと筆者は考える。なぜなら、意志的な動作であれば、他の動詞であってもスル形で「態度表明」として表すことが可能であるからである。たとえば、工藤（1995）は、

13) 僕は彼女の言うことを信じる。

14) 私は試験も必要であると考える。

などの文を能動的な態度表明文として捉えるわけだが、考えてみれば、一人称の意志を表す文はすべて態度表明的な文になりうる。

15) 私はイギリスに留学する。

16) 私はデパートで買い物をする。

また、意志的な動作でなくても、態度の表明を表すことがある。

17) 私は何としてでも今度の試験に受かる。

「試験に受かる」は自分の意志ではどうしようもないことであるが、ここではそのような強い希望を表明していると言えるのである。さらに、このような能動的な態度表明文は、日本記述文法研究会（2007）の言う、動き動詞における宣言的な用法にも通じている。

18) ここに開会を宣言する。

これらのスル形に共通するのは、動詞のあらゆる事態についてスル形でもって相手に表明することである。したがって、このような態度の表明性は動詞全体に共通するものであり、内的情態動詞の特徴として記述されるべきではないのではないだろうか。

そうすると、残された内的情態動詞の特徴はスル形における感情・感覚表出ということになる。そこで、スル形で現在の心的状態を表すものを調べてみると、必ずしもすべての内的情態動詞がそのような働きを持っているわけではないことがわかる。工藤の分類で見ると、知覚動詞と感覚動詞ではほとんどの動詞がスル形で現在の心的状態を表すが、思考動詞と感情動詞では一部だけが現在の状態を表すことになる。

19) 何か音が聞こえる。（知覚動詞）

20) 古傷が痛む。（感覚動詞）

21) 彼は来ないと思う。（思考動詞）

22) ?彼が盗んだと疑う。（思考動詞）

23) バスが来なくて、いらいらする。（感情動詞）

24) ?講演の内容に感動する。（感情動詞）

例文22)と例文24)については、未来形としては成り立つかもしれないが、発話の瞬間の気持ちを伝える表現としては不適切である。「疑っている」「感動している」とすべきであろう。また、これらの動詞には人称性の制限も見られない。3人称でのスル形やシタ形での表現が可能となるからである。

25) きっと山田さんは彼が盗んだと疑う。（cf. きっと私は彼が盗んだと疑う。）

26) 山田さんは彼が盗んだと疑った。（cf. 私は彼が盗んだと疑った。）

以上のことから、感情形容詞との共通点ということで考えてみると、例文22)の「疑う」

や例文24)の「感動する」はスル形での感情表出を持たず、人称制限もないことから、内的情態動詞というより、工藤のいう外的運動動詞に分類されるべきものではないだろうか。工藤はスルーシテイルのAspect対立をもつ内的情態動詞と外的運動動詞との違いは話し手の直接体験から来る人称性にあると主張するが、そうすると、これらの「疑う」や「感動する」は内的情態動詞に分類される根拠はなくなるわけである。筆者はスル形で人間の内的状態を表すことのできる動詞だけをまとめて、「内的状態動詞」と呼ぶことにしたい。以下はそのような動詞の例である。

スル形で現在の内的状態を表す動詞

思う、わかる、気になる、見える、聞こえる、におう、味がする、音がする、臭いがする、予感がする、めまいがする、吐き気がする、いらいらする、はらはらする、ざらざらする、すべすべする、つるつるする、ぬるぬるする、ドキドキする、じとじとする、べたべたする、むんむんする、ふらふらする、ふわふわする、くらくらする、ひりひりする、ずきずきする、がんがんとする、じんじんする、かさかさする

ここで、これらの動詞に共通する点について確認することにするが、一人称の内的状態を表し、3人称には使えないという特徴がある。(括弧内は工藤の分類である。)

- 27) ?山田さんは、彼は来ないと思う。(思考動詞)
 - 28) ?バスが来なくて、山田さんがいらいらする。(感情動詞)
 - 29) ?山田さんに何か音が聞こえる。(知覚動詞)
 - 30) ?山田さんの傷が痛む。(感覚動詞)
- これらの表現はシテイル形にすると表すことが可能となる。
- 31) 山田さんは、彼は来ないと思っている。(思考動詞)
 - 32) バスが来なくて、山田さんがいらいらしている。(感情動詞)
 - 33) 山田さんには何か音が聞こえている。(知覚動詞)
 - 34) 山田さんの傷が痛んでいる。(感覚動詞)

これについては、工藤(1995)が、「シテイル形式のほうは、外的運動動詞と同様に、〈継続性〉を表し、シテイルであれシテイタであれ、人称性から解放された確認・記述文となることである。」と述べている。この指摘にさらに付け加えると、シテイル形で表されるときは、内面的な状態がその人の外観に表れている時であり、話者はその人の様子を見て、描写することが可能になるのである。

このように、これらの動詞のスル形には1人称の内的状態だけに限られるという人称制限があり、シテイル形ではそのような制限はなくなるのである。また、シタ形もスル形と同様に1人称の使用制限がある。

- 35) 何か音が聞こえた。(知覚動詞)
 - 36) 古傷が痛んだ。(感覚動詞)
 - 37) 彼は来ないと思った。(思考動詞)
 - 38) バスが来なくて、いらいらした。(感情動詞)
- 3人称の使用はやはり不自然である。

39) ?山田さんは、何か音が聞こえた。(知覚動詞)

40) ?山田さんは、古傷が痛んだ。(感覚動詞)

41) ?山田さんは、彼は来ないと思った。(思考動詞)

42) ?山田さんは、バスが来なくて、いらいらした。(感情動詞)

このように、3人称の使用は不自然となるが、小説などにおける描写ではスル形も含め使用が可能となるのが、工藤によって指摘されている。この現象は、まさに感情形容詞の特徴と共通するものである。

ここまでスル形で内的状態を表す動詞の特徴を見てきたが、シタ形で現在の状態を表すものがある。工藤(1995)は感情動詞と感覚動詞の中にシタ形で現在の内的状態を表すものがあるとし、それらを下位分類としている。たとえば、

43) 君の態度には呆れたよ。(感情動詞)

44) あー、のどが渴いた。(感覚動詞)

などの例である。これらの内的情態動詞はシタ形で現在の1人称の内的な状態を表すと言える。3人称では不自然な表現となる。

45) ?山田さんは君の態度に呆れたよ。(感情動詞)

46) ?山田さんはのどが渴いた。(感覚動詞)

3人称の現在の状態はシテイル形で表さなければならない。

47) 山田さんは君の態度に呆れている。(感情動詞)

48) 山田さんはのどが渴いている。(感覚動詞)

3人称の過去の状態はシテイタ形で表される。

49) 山田さんは君の態度に呆れていた。(感情動詞)

50) 山田さんはのどが渴いていた。(感覚動詞)

では、一人称の過去はどのように表されるのだろうか。これは、現在の状態と同じくシタ形で表される。たとえば、

51) あの時の、君の態度には呆れたよ。(感情動詞)

52) あの時は、のどが渴いたね。(感覚動詞)

などと言えるわけである。また、これらの動詞のスル形は、未来形の文となる。その場合、人称制限はなくなる。未来の事態であれば、第3者の気持ちを推量するという余地が生まれるからであろう。

53) そんなことをしたら、彼はきっと呆れるよ。

54) 水筒を持っていかないと、のどが渴くよ。

この内的情態動詞の未来形については、工藤も言及しており、「直接体験性の有無を問題にしえない、人称性に関わる未来のことについては、人称性に関わるスルーシテイルの相違を、問題にしえないといえよう。」と述べている。以上のようなシタ形で現在の内的状態を表す動詞には以下のものがある。

シタ形で現在の内的状態を表す動詞

あきあきする、あきれる、安心する、驚く、～くなる（「眠くなる」、「悲しくなる」など）がっかりする、困る、せいせいする、退屈する、助かる、びっくりする、ほっとする、まいる、弱る、しびれる、疲れる、（のどが）渇く、（腹が）へる

4. 内的状態動詞の再分類

ここまで扱ってきた内的な状態を表す動詞について、動詞全体の中での位置づけには様々なものがある。たとえば、日本記述文法研究会（2007）では、動詞を「動き動詞」と「状態動詞」に分け、ここでいう内的な状態を表す動詞は、「動き動詞」の中に入れている。そこでは、大きく「継続動詞」と「瞬間動詞」に分類され、さらにそれぞれの動詞群は「主体動作動詞」と「主体変化動詞」に分けられる。たとえば、「考える」「楽しむ」「悲しむ」などは「継続動詞」の「主体動作動詞」、「覚える」「知る」「（住所が）わかる」などは「瞬間動詞」の「主体変化動詞」などとなっている。この分類では、スル形やシタ形で現在の状態を表す内的動詞の扱いも上のいずれかに属することになるが、人称制限や現在の状態を表すのにシテイル形を必要としない点などを考えると、このままでいいのか疑問が残る。感情形容詞との共通点も多くあり、何らかの分類が必要であると思われる。

これに対し、工藤（1995）では、内的な状態を表す動詞を「内的情態動詞」という大きな枠組みで整理し、外的運動動詞と静態動詞とともに、独立した動詞群として分類している。ただ、内的情態動詞の特徴として挙げているスル形での「態度表明」については、内的情態動詞に限られるものではなく、他の動詞との区別に使うのは適当ではないだろう。もうひとつの特徴として挙げているスル形での「感情・感覚表出」の場合、明らかにすべての内的情態動詞に共通するものでなく、その点が内的情態動詞としてのグループ分けに疑問を感じてしまう。

日本語を教えるという立場でこれらの動詞の分類を考えてみると、工藤のいう内的情態動詞から、スル・シタ形で現在の内的状態を表さないものを「外的運動動詞」に振り分け、残った内的状態を表す動詞を「静態動詞」の中に入れてしまえば、すっきりとした分類になるのではないだろうか。スル・シタ形で内的状態を表す動詞は、明らかに「スルーシテイル」や「シターシテイタ」というアスペクト的対立を完全に満たすわけではないことから、「静態動詞」としての位置づけのほうが適当であると思われる。

筆者の試案としては、日本記述文法研究会（2007）の動詞分類に沿う形で、「状態動詞」の中に、「スル系内的状態動詞」と「シタ系内的状態動詞」を付け加えるという分類を提案したい。これを、日本記述文法研究会の動詞分類に組み入れた形で表すと、以下のようになる。

動き動詞	継続動詞	主体動作動詞	遊ぶ・楽しむ・立てる・片づける
		主体変化動詞	暖まる・成長する
	瞬間動詞	主体動作動詞	一瞥する・預ける・首にする
		主体変化動詞	座る・閉まる・死ぬ
状態動詞	スル形状態動詞		ある・要る・相当する・値する
	スル・シテイル形両用状態動詞		意味する・存在する・異なる
	シテイル形状態動詞		きわだつ・とびぬける・そびえる
	内的状態動詞	スル系	思う・どきどきする・臭いがする
		シタ系	疲れる・腹がすく・のどが渴く

日本語教育という立場からこの表を見ると、これまではっきりと見えなかったスル・シタ形で現在の話者の気持ちを表す動詞群の存在が明らかとなり、感情形容詞と共通する観点から教えることが可能となる。特にシタ形で現在の感情を表す動詞は重要であり、これまで日本語教育の中ではほとんど触れられてこなかったものであるが、日常ではごく普通に使われている表現であるため、内的状態動詞として早い段階から学習者に導入していく必要があるのではないだろうか。

【注】

- (1) ここで言う「状態動詞」と後に出てくる「動き動詞」はいずれも日本記述文法研究会(2007)の用語による。
- (2) 例外として、西尾(1972)は「書き手(話し手)が第3者の気持ちに入り込んで、自分のことのように表現する場合が考えられる。」としている。
- (3) 西尾(1972)は、対象語という形ではない、条件句としても表されるとしている。

【参考文献】

- 金田一春彦(編)(1976)「国語動詞の一分類」『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房
- 工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテクストー現代日本語の時間の表現ー』ひつじ書房
- 杉村泰(2007)「複合動詞との共起から見た日本語の心理動詞の再分類」『二〇〇七年日本語数学国語会議論文集(東呉大学日本語文学系)』
- 寺村秀夫(1972)『日本語のシンタクスと意味I』くろしお出版
- 西尾寅弥(1972)『形容詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版
- 日本記述文法研究会(2007)『現代日本語文法3』くろしお出版

Classification of Mental Verbs in Japanese

HARASAWA, Itsuo

Japanese static predicates referring to mental activities have two forms; One is feeling adjectives (Kanjo-Keiyoshi) and the other, mental verbs (Naiteki-Jotai Doshi). Both predicates have describing the speaker's inner situation such as emotions, thoughts, sense and perception in common. Though most Japanese verbs are perfective (view a situation in its entirety without reference to its internal structure), mental verbs have some elements of an imperfective aspect, similar to static verbs that view a situation with regard to its duration. Mental verbs are thought to be categorized somewhere in the middle of dynamic and static verbs in Japanese. When we look carefully at these mental verbs, we can see that some verbs describe the speaker's inner state with a form of "suru" or "sita" while the others view a situation in its entirety with "suru". With this linguistic feature, I propose that these inner verbs with imperfective character be classified as static verbs, and those with perfective aspect as dynamic verbs. This classification would be useful in a Japanese teaching environment since they are obviously different in the syntactic manner in which they express the speaker's mental affairs.